



▲ 家庭へしあわせ運ぶおかめ踊り



▲ 手とり足とりのアドバイス



▲ ウチらもりっぱに踊れます



▶ 悪魔払いーてんくさまのお通りだ

伝統がある心がある郷土芸能

|| これからも伝えたい ||

人の和がささえ

今年も六月十六日、新飯田、神明宮の祭りがやってきた。

「新飯田ア」

新飯田祭りの名物ものは

ヨイヤホイ

小川連中のヤールレ 浜おけ

さ ヨーイ ヨーイ ヨーイ

ヨイ イヤホイ

カチャ、カチャ、カッチャンと

いう拍子木の音、ビーヒャラ

ー ドドン テテンテンという

笛、太鼓の音色とともに、小川

連中の人たちが元気にうたう「

浜おけさ」が聞こえてきます。

いよいよ祭りの幕あけ――。

「大名行列」あばれみこ

し」といった、優雅で勇壮な祭

り行事の先陣として、小川連中

の人たちが舞い、踊る――『岩

戸舞い』『光太寺』『おかめ踊

祭りや郷土芸能は、今日でも私たちの生活の一部として、根強く息づいています。急激な変化を見せる社会にあって、祭りや郷土芸能に、ひとつの「潤い」を感じるのは事実です。新飯田地区に残る郷土芸能をとりあげ「伝承」という観点から見直しながら「文化の継承」について考えてみたいと思います。

り」などの六つの舞い踊りは、昔から伝承されたもので悪魔払いとして一日中、各町内をねり歩く。素朴でしかも人情味あふれる小川連中の舞い踊り――祭りの気分をいやがうえにもそそり、人々の心に楽しさと呼ぶ……今や新飯田っ子には、欠かせないものとなっています。

若者が習い伝える

ところで、いつころから、このようなものが新飯田の人々に舞い、踊られるようになったのだろうか。小川連中の世話役である大野助作さん（五九〇川前甲）に、いろいろうかがってみました。

「確実な資料はないが、明治の初期ころ、隣の三条市田尾に

渋谷二生という芸人がいて、その人の影響でこういったものが入りこんできた」と、伝え聞いている。

「当時、新飯田は農家が多く農繁期を過ぎればこれといった仕事もなく、とくに若者たちは時間を余していたことから芸ごとに興味を示し、それを覚え、祭りで舞い踊ったのが今に伝えられてきたようだ」と大野さんは推測する。

父から子と継ぐ

こうして生まれ、育った小川連中の舞い踊りも、戦時中には人手不足から一時中断。その後社会も落ち着き再び復活――。

「子孫のいる限り受け継いでくれるだろう……」と、戦後まもなく、練習小屋が建てられるなど、先人たちのたゆまない努力が続けられてきました。

今はその努力も実り、舞い踊りに必要な子どもたちが年々増え、今年には三十人にもなりました。

本番では、そらいのゆかた、豆しぼりのハチ巻き姿で、舞い踊りをじょうずにこなします――見物のお年寄りの中には思わず

子どもたちにも聞いてみました。「練習？ 楽しいよ。だってみんな踊りが好きなんだ」とくったくのないことばが返ってきます。

長い伝統につかわれてきた新飯田の郷土芸能は、今なおそこに住む人たちの連帯意識を生み出し、世代間の交流を自然に芽ばえさせていく力を持っているように思われます。

あどけない表情で舞い踊る子どもたちが、いつしか父、母になったとき、自分たちの子にこれらのよいものを受け継がせていくのかもしれない。

私たちも、この機会に、それぞれのところで息づいている郷土芸能を、後世に伝えていく義務があることを、あらためて考えてみたいものです。